

月刊 ウィーン

GEKKAN-WIEN

Monatsmagazin Japanisch

現地オリジナル取材と編集で
ウィーンを伝える月刊情報紙

創刊平成元年 創刊34年目 **Nr. 394**

2022年11月号



杉本純の原子力の話II ウィーンと京都

127

企業と学生の採用・就職活動支援と原子力産業界への理解向上を目的とした「エネルギー未来フォーラム『原子力産業界セミナー2024』」(主催：原産協会/関西原子力懇談会)が十月二十五日、東京都立産業貿易センター(東京・港区)で開催され、企業・機関四二社が出展し、二五八名(オンライン参加の三二名を含む)の学生らが訪れた。同セミナーは例年同様、大阪でも開催(十月二十九日)される予定で、東京会場に参加した企業・機関も含め三四社が出展した。いずれの会場とも参加企業・機関数は昨年度を上回り、東京会場の来場者数はおよそ三割増となった。



<https://www.jaif.or.jp/journal/japan/15040.html>

今回、初参加の(株) Biossom Energy は、革新炉研究開発に取り組む設立から間もないベンチャー企業。日本原子力研究開発機構で二〇年間にわたり高温ガス炉の運転・保守・研究開発に従事してきたというCEOの濱本真平氏は、かつて指導を受けた上司の気概を回顧しながら、「人が減ってしまったような産業も衰退する」との思いを強く感じ後進の育成を目指してセミナーに出展したと話している。

放射線機器を手掛けるセーコー・イーアンド・ジー(株)は二年ぶりの参加となったが、自身も同セミナーに参加したという採用担当者は、食品や芸術系など、多様な分野の学生から関心が寄せられているという。小惑星「リュウグウ」の試料分析の放射線測定に関する説明に注目が集まったと話している。

初回からセミナーに参加している原子力発電環境整備機構の担当者は、「今回は原子力関係の学生が多い」、「学校の授業で地層処分について聞いたという学生が多い」と印象を話している。

セミナーに訪れた都内の大学で原子力を専攻する学生

(三年生)三名のグループに話を聞いたところ、Aさん「これまで耳にしなかった企業もあるが、さらに色々なブラスを回ってみたい」。Bさん「新型炉開発に期待したい」。Cさん「原子力に関する知識を一般に提供する場が必要だと思う」などと語った。

さて、今月のウィーンと京都の対比では、両市出身の偉大な経済学者・思想家(その二)を紹介したい。一八八一年にオーストリアハンガリー帝国のレンベルク(現ウクライナ、リヴィウ)に生まれたルートヴィヒ・フォン・ミーゼスは、ウィーン大学で法学を学ぶが、カール・メンガーの「経済学原理」により経済学に目を開かれる。一九〇六年、ウィーン大学で法学博士号を取得し、オーストリア帝国財務省に勤務した。一三年から二五年間ウィーン大学教授を務め、三四年から四〇年までジュネーブの上級国際研究所教授を務めた。戦時中の四〇年には米国に亡命して自由な立場で教育や執筆活動をし、四五年にはニューヨーク大学教授に就任した。ミーゼスの「貨幣と銀行信用の理論」では、通貨の価格あるいは購買力は、需要と供給によって定まるが、その需要は通貨の直接効用でなく、通貨の購買力によって決定されるという循環論法を解決した。経済計算論争などで計画経済を鋭く批判したことで知られている。ミーゼスは福祉

国家など大きな政府は介入主義であり、必ず経済を停滞させるとして過去の事例から批判した。「社会主義-経済学社会的研究」では、社会主義やマルクス主義を痛烈に批判し、当初社会主義者だったフリードリヒ・ハイエクらを自由主義者へと変えた。貨幣的景気理論も有名である。ドイツの経済学者ヨルク・グイド・ヒュルスマンは、ミーゼスは二〇世紀最大の経済学者であると評価している。オーストリア学派を代表する人物の一人であり、現代自由主義思想に大きな影響を及ぼした。著名な弟子にハイエクがいる。

一方、一九〇四年に福井県敦賀郡敦賀町(現・敦賀市)に生まれた桑原武夫は、京都府立第一中学校(現洛北高等学校)、第三高等学校を経て、二八年に京都帝国大学文学部仏文科を卒業。旧制大阪高校教授兼京都大学文学部講師を経て四三年、東北帝国大学法文学部助教授。四八年、京都大学人文科学研究所(京大人文研)教授、五九年には同所長を務めた。スタンダーやアランの研究により、

フランスの文学や評論を広く日本に紹介した。京都帝国大学教授を務めた父・鷹蔵と交流のあった西田幾多郎や内藤湖南ら戦前の京都学派の碩学の警咳に早くからじかに接し、戦後は同年代の吉川幸次郎や貝塚茂樹など京都学派の中心的存在として、さまざまな文化的ムーブメントに主導的な役割を担った。フランス文学にとどまらず、深い学識と行動力は多方面に及び、俳句を論じた「第二芸術論」は議論を呼んだ。また、京大人文研を本拠としてさまざまな分野の研究者を組織し、先駆的な学際共同研究システムを推進し、「フランス百科全書の研究」、「ルソー研究」など日本の人文科学分野における数々の業績を通じて、梅棹忠夫ら多くの文化人を育てた。同期である今西錦司らとともに登山家としても知られ、五八年には京都大学学士山岳会の隊長として、パキスタン領のチョゴリザ山への登頂を成功に導いた。人材育成について、「人間は四〇代後半になったら、自分の力を弟子なり後進なりに分けてあげなければいけない。人を育てるにはエネルギーが要る。老齢になった後に名誉職のような形で養成するのではだめだ。力の充実している時期に後進を養成しなければ人は育たない」と述べている。八七年に文化勲章を受章している。

余談であるが、ミーゼスの経済学には縁はなかったものの、学生時代に同じ左京区に住んでいた桑原の「ルソーの研究」、吉川幸次郎との共著である「新唐詩選続編」やスタンダーの「赤と黒」の翻訳は読んだことがある。今月も両市に関連する偉大な経済学者・思想家を紹介することができた幸運に感謝しつつ、ウィーン市が所蔵するミーゼスの写真を掲載させていただく。

余談であるが、ミーゼスの経済学には縁はなかったものの、学生時代に同じ左京区に住んでいた桑原の「ルソーの研究」、吉川幸次郎との共著である「新唐詩選続編」やスタンダーの「赤と黒」の翻訳は読んだことがある。今月も両市に関連する偉大な経済学者・思想家を紹介することができた幸運に感謝しつつ、ウィーン市が所蔵するミーゼスの写真を掲載させていただく。

余談であるが、ミーゼスの経済学には縁はなかったものの、学生時代に同じ左京区に住んでいた桑原の「ルソーの研究」、吉川幸次郎との共著である「新唐詩選続編」やスタンダーの「赤と黒」の翻訳は読んだことがある。今月も両市に関連する偉大な経済学者・思想家を紹介することができた幸運に感謝しつつ、ウィーン市が所蔵するミーゼスの写真を掲載させていただく。



■ 杉本純 元京都大学教授 元原子力機構ウィーン事務所長 ■

杉本純の原子力の話II 「ウィーンと京都」の第1回からの全記事が次のサイトに掲載されています : <http://wattandedison.com/Sugimoto.html>

本誌執筆者の主な著作

- 河野純一著「不思議なウィーン」
- 河野純一著「ウィーン遺聞」
- 河野純一著「ウィーンのドイツ語」
- 河野純一著「横顔のウィーン」
- 須永恆雄訳「ウィーンの内部への旅」
- 須永恆雄編訳「マーラー全歌詞対訳集」
- 近藤常恭著「ウィーンの街の物語」
- 福田和代共訳「サフィア」

